

# 千里大学で自主研究の成果をまとめ発表

南富良野町の高齢者大学「千里大学（池部 彰学長）」では、今年度の学習計画に「自主研究」を新たに取り入れ、各科（本科・大学院・専修科）において研究テーマを設定し、通常の授業以外の時間で約半年をかけて調査・研究が行われました。

このほど、その成果をまとめ、2月23日の公開授業において「発表会」が行われ全員で発表しました。

研究成果は、それぞれ各科目に全員で分担し、レポート形式で成果をまとめました。

レポートには、視察研修や野外活動での様子などの写真を用いて分かり易く詳細にまと

められ、研究発表会では、スクリーンに視察見学の様子や当時や現在の様子の写真を映し出しながら、レポートを基に全員で発表しました。各科における「発表内容」の概要やレポートの一部を紹介いたします。

## ○本科研究テーマ「地」

「史跡調査・現地確認」  
「今はどうなっているのか」

本科では様々な史跡から旧根室本線や駅通、旧町営牧場

発表者 本科生 小松 忠雄さん・定塚 美恵子さん

狩勝信号場は、峠の落合側に設けられ、上り方に引き込み線2線と、下り方折り返し線1線をもつ信号場です。

信号場は、列車の行違いを行うためにスイッチバック停車場として設けられたもので、乗降客の扱いをしない駅のことです。この線路は単線区間なので、列車は引込線に入り、待機し、他の列車が通過した後にポイントを切り返し出発していました。

列車や鉄道を守るため、駅員9家族・保線員21家族の30世帯が生活していました。周囲には、商店などは無く、子ども達は落合小学校に通学し、なかには富良野高校まで通学していた生徒もいたそうです。本科伊藤和子さんのご主人はこの信号場で生まれたそうです。

唯一の公共施設として「南富良野村公民館狩勝分館」が駅の近くにあり、集会場の役割を果たしていました。本科佐藤圭子さんのご主人が、当時、公民館事業として映写機をかついで行き上映していたそうです。

跡地を散策しましたが、今も駅舎や官舎の土台と「日本国有鉄道」の標識が残っていました。

明治40年開業以来、59年間営業し、昭和41年10月1日に新狩勝トンネルに切り替えられ、信号場の使命を終えました。



本科生の手作り紙芝居による発表の様子

発表者 大学院生 高津 孝子さん

オオウバユリ（大姥百合）ユリ科 在来種 調査月：5月

観察地周辺は、オオウバユリの若葉をはじめトリカブトの新芽とニンソウの花の群落が見られました。今の時期は、オオウバユリの鱗茎が肥大していないので7月頃に掘ることとしました。

日本には、ウバユリとオオウバユリが自生していますが、共にユリ科の「1回繁殖型多年草」です。一生のうちに、1回だけ花を咲かせると、枯れてしまう植物です。開花する年には、大きな花茎に多くの花を咲かせます。花を付けた株は、一生を終えますが、元株の脇に小株が育っています。

オオウバユリは、北日本の日本海側に多く自生し、花茎は250cmに達し大型化しています。一方、ウバユリは、南日本の太平洋側に多く自生して、花茎は50cm程度で、自然環境により著しいサイズの変異が生じています。

鱗茎は、良質のデンプンを含み食用にできます。アイヌの人々の食料の中では、穀物以上に重要な位置を占めていました。また、日本人も開拓当時、冷害で食料不足となったときオオウバユリの根を食料とし、飢えをしのいだと伝えられています。

（小出牧場）や旧十勝街道、幾寅内藤共栄地区に絞り調査研究が行われました。

## ○大学院研究テーマ「植」

「野生植物を調査」

大学院では町内に自生している野生植物を選択し、自生地を尋ね、観察しました。

発表では植物の分類、学名や和名、食性や効能・毒性、国内の生息地域や植物の大きさなど詳細に行われました。調査した野草  
・ネコヤナギ ・クレソン  
・フクジュソウ ・フキ

発表者 専修科生 高橋 久さん

「水の思い出」

私は、小さい時から川の流れて、生きてきたと思います。川の近くに家が並び、近所仲よく生活してきました。川には、それぞれの家の川場所があり、足場を作り川の流れてを良くしたり、使いやすく何時もきれいにし、浅いところ深いところを父が作っていました。

浅いところでは、野菜や米を洗ったり、鍋、釜など、洗濯も川でしました。今で言うと、台所と同じでした。

深いところは、水を汲む場所で、家には大きな水ガメ、又は、オンコの水桶が有り、川の近くは、五右衛門風呂が有り、水を運んでおくのが子供の仕事でした。水を運ぶ道具は、バケツ、四角い一斗ガンガンなどがあり、木の水桶は天秤棒でかつぎました。天秤棒はバランスをとるのが大変でした。子供同士で助けたり、助けられたりしたことが思い出されます。

子供の頃は、川が一番の遊び場で、みんなが集まりカジカ・ドジョウ・ヤツメ・ザリガニがいました。沼のほうには貝などもいました。みんな焚き火をして、焼いて食べたりしました。岸边には、ノイチゴ・グスベリや、スモモの大木があり、みんなでゆするとパラパラと落ちてきました。このように、野生の「おやつ」が沢山ありました。懐かしいです。

親から子供へ、孫達へと伝わって行ったと思います。昔の自然と美しい川も時代が変わり、今はもう残っていませんが、思い出は消えないと思います。

私が知っている場所、川には川場所、井戸には井戸場所、湧水も場所があり、池にも池場所がありました。それぞれ皆さんが水を使っています。水を運ぶのは、場所が違ってみんな子供の仕事でした。

栄町で、営林署の前の小野寺さんは木で水路を作り川水を使用していました。吉本操さんは井戸、清野さん宅は前「平田病院」があり、大きな池を挟んで、私の家がありました。その池は冬はスケートの遊び場でした。神社の近くの吉本博さんの宅地には、大きな池と、大きな湧水の二ヶ所あり、一ヶ所は湧水で家庭用に皆さんが使用していました。今でも使用できます。吉本さんから下がった所で岩淵さんが井戸を使っていました。その他には、町の方の中田新聞店さんは井戸でした。楯さんのお寺も、酒井さんのお寺も、中村天理教さんも井戸を使っていました。大宮さんは湧水で、石で囲って水場を作り、小屋掛けをしていました。この水場も皆さんで使用していましたが、国道が出来た時に取り壊されました。私もよく飲んでいたのでしばらくは淋しかったです。でも、所々に小川が流れていました。

時代が変わって、農協の横に岩佐ポンプ店が出来て、ポンプの時代になり、やがて、水道へと変わって来ました。

幾寅地区簡易水道施設を見学して、めったに行って見ることがない源流の位置や取水装置など、上流から流れて来るきれいな水を見て、言葉では言い尽くせない感動を覚えました。

家に帰ってから思い出しました。45年ぐらい前だと思います。山菜取りの名人が居て、4・5人でタケノコ山へ行って来ました。細い山道を奥へ奥へと進むうちに、川の水が流れて来る所に出会い、さらに進むと水の流れ始めを見ました。今思うと、源流だったのではないかと思います。私の見た水は、左側の水でないかと思いました。

今は、川水から水道水へと変わりましたが、大自然の川の流れて緑の森は、昔から変わっていません。

おいしい水を、84年間飲ませて頂き、これからの人生はわからないけれど、思い出を沢山頂き、ありがとうございます。

また、空知川源流から、石狩川河口までの遠い所まで視察研修させて頂き、勉強させて頂いたことを深く感謝申し上げます。

- ・ エゾエンゴサク
  - ・ ヤチブキ
  - ・ オオバナノエンレイソウ
  - ・ ミズバショウ
  - ・ オオウバユリ
  - ・ エゾトリカブト
- また、「オオウバユリ」から澱粉を採取したり、磨り潰して保存食や開拓当時の再現料理（調味料や油を使用しない）として団子を作り、試食しました。感想は繊維質が多くスジっぽかったそうです。



野生植物について発表する大学院生

## ○専修科研究テーマ「水」

「空知川の流れてをたずねて」

専修科では、生活に欠くことの出来ない「水」をテーマに、町内の家庭用水として利用されていた湧水やため池の様子や今も利用されている家庭を訪問し、四季での水量の変化などを聞き取りました。また、浄水場施設や農業灌がい用水施設などを視察し、暮らしの中の水の活用について調査しました。



石狩川河口まで視察した専修科生（石狩灯台前）

そのほか、町内を流れる空知川に沿って石狩川河口までたどり、途中に設置されている頭首工や用水路、石狩川の合流点や記念碑などを視察し、川にまつわる歴史などを学習しました。

千里大学の皆さんは、発表までは緊張した面持ちでしたが、発表を終えると達成した充実感から笑顔で、互いに讃えあっていました。